

俳句にみる地域性

五 條 英 司

現在は、空前の俳句ブームであるといわれている。私も5年ほど前から、ある素人同士の句会に出るようになったので、この膨大な俳句人口の底辺に入るのかも知れない。ところで、わずかに17音に限られるためか、俳句に自然地名が入ることはきわめて少ないが、その少ない中から、それぞれの自然の特性をよく表わしている名句を、私なりに選んでみた。

穂高なる吹雪に死ねよとぞ攀ぢぬ (石橋辰之助)

冬の穂高連峰のきびしさを彷彿させる。作者は、ほかにも山岳に関する佳句を多く残している。

龍胆や巖頭のぞく剣岳 (水原秋桜子)

北アルプスの中で最も峻険といわれる剣岳の岩峰と、近景のミヤマリンドウの花との対照が、美しい調べで詠まれている。

弥陀ヶ原 凜ふばかり春の雪 (前田普羅)

立山の西腹にある溶岩台地、弥陀ヶ原に、揺れ動くように降っている春の雪から、高山の霊気といったものが感じられる。「弥陀ヶ原」の名は、極楽浄土を連想させる。

秋澄む日さし入りがたし黒部川 (水原秋桜子)

山頂と谷底との高度差1,500~2,000mという、日本最深の黒部峡谷の特徴をよく表わしている。

駒ヶ嶽凍てゝ巖を落しけり (前田普羅)

甲斐駒ヶ岳の主峰の東側には、摩利支天といわれる岩壁がある。摩利支天は武士の守護神とされるが、その語のもつひびきが自然の威力というものを言外に匂わせているようでもある。

祖母山も傾山も夕立かな (山口青邨)

九州山地の主峰である祖母山と傾山が、にわかに夕立に包まれた。それだけのことであるが、傾山を「かたむくさん」と読ませることで、快い名調子で大自然の動きを捉えている。

阿蘇山頂がらんどうなり秋の風 (野見山朱鳥)

阿蘇の中央火口丘、中岳火口での感慨であろう。「がらんどう」の火口には、同じ「秋の風」でも、蕭殺たる晩秋の風がふさわしい。

象潟や雨に西施がねぶの花 (芭蕉)

芭蕉の「奥の細道」の旅(1689年)のとき、象潟は鳥海山からの泥流丘が潟湖に浮かぶ、景勝の地であった。芭蕉は、象潟に着いた日は雨の降る中で、天候の回復した翌日は潟に舟を浮かべて、その風光を觀賞した。雨中の象潟に咲く「ねぶ」(ネムノキ)の花を、蘇軾の詩「西湖」の中で、化粧しなくても美しいとうたわれた中国春秋時代の美女「西施」にたとえた。

象頭山その他春山皆似たり (松本たかし)

象頭山は琴平山の別名。讃岐平野に点在する、古い溶岩台地が侵食されて生じたメサ・ビュートといわれる丘が、春になって一様に生氣をとりもどしているさまが、眼前に浮かぶ。

カルストの波立つ冠山萌ゆる (石原八束)

冠山は固有名詞でないかも知れないが、「カルストの波立つ」は、秋吉台のカッレンフェルトを形容したものと思われる。その岩柱の間に萌え出た草の芽の生命力が感じられる。

暑き日を海に入れたり最上川 (芭蕉)

加藤楸邨氏によれば、暑い夏の1日の終わりの涼気が強調されているという。日和山あたりの砂丘上から河口を見下ろしての感懐であろうか。

田も牧もあらず雪積む石狩は (松崎鉄之介)

白一色になってしまう広大な石狩平野の冬の景を、いい尽している。

秋風や浜坂砂丘少しゆく (高浜虚子)

最高点92m、日本最大の起伏を示す鳥取砂丘。「少しゆく」がその雄大さを暗示している。

露刈るや霧よりしろき屈斜路湖 (水原秋桜子)

北海道には、丈が2m、葉の直径が1.5mにもなるアキタブキが自生している。その露の刈り跡から見下ろされる湖面が白いのは、湖岸に湧出している温泉のためであろうか。

松島や鶴に身をかれほととぎす (曾良)

「奥の細道」の旅に芭蕉に随行した曾良の句。「ほととぎすよ。この松島の絶景にふさわしく、鶴の羽を借りて着て鳴き渡ってくれ。」と、間接的に松島を讃えたのである。(日本大学)